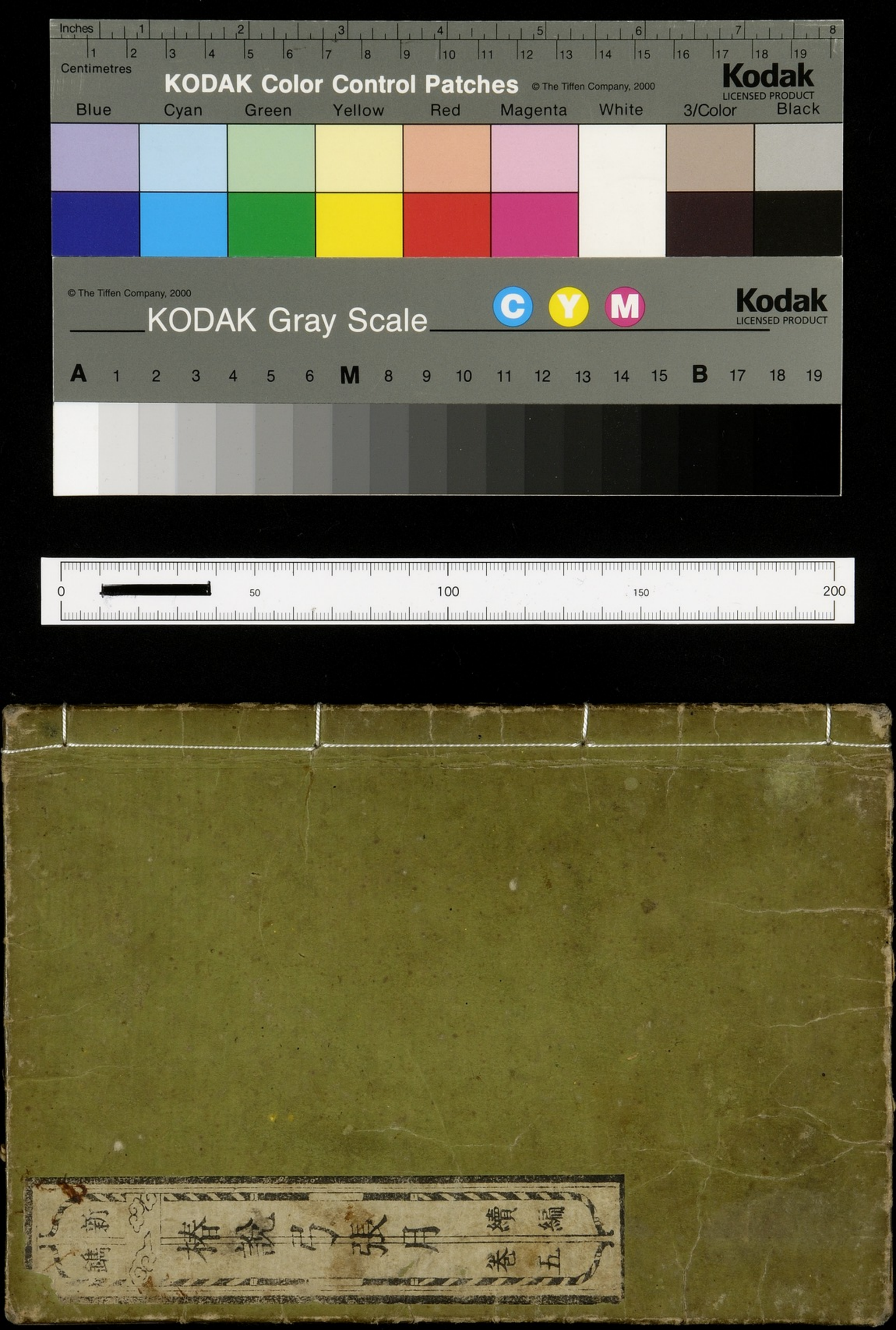


『椿説弓張月』続編巻五

鎮西八郎
爲朝外傳 椿説弓張月續編 卷之五

東都 曲亭主人編次

第四十一回

松壽月前ハ妻の屍を躱し
真鶴身後ハ主の首ハ代れ

廉夫人ハ。寧王女ハ引てゝれ。里之子松壽ハ扶掖もて。姑場のかこへと落ゝ。討手の軍兵涌ごゝ出まりて。脱ゝ果べうもあらぬ。されいともかくもあらばなれ一方の囲ゆとりて。王女を後ゝ落ゝ進ゝんとて。忽地ハ自殺ゝ。松壽ハぜひなく。おん首級ゆとりて。利勇が陣ハ赴て。信ゆゝらひらゝて。囲ゆ解せんと謀れども。利勇元来狐疑ゆゝれば。なほ兵士を退けず。その矛を野嵩のほとりに屯して。里の悪少年ハ分付。

椙山女学園大学図書館

王女の往方を捜索ること。いと急なるに。松壽はまもなく苦しけなるど。氣色あらえせどして。ゆくゑびを王女を追ひ留べたはしを。まうし請く。姑場のかさへとろくにいふもして。王女は環會なり。縛の越を告進ずせく。脱はまふぐくはかりともに脱をり。脱をかくは。太刀の刃れ徒んに役は。やうやうに防ぎ戦ひ。死生の御導を。いとさわとて。只管おろひ定めても。定めがたれは与那城。こころ安勢里の村稍安処。何地へ伊討の御ら過く。野を越山を越ふの乗りて来るのあり。松寿はこれをうく。ふく詠こと村長めてれ翁を呼びとめて。縁故を問ど。そのの答く。吾倘を姑場の御民なるが。ろれのどもが。城隍祭祀は生るるは不意も南風原の親方利勇の仰を禀。寧王女を摘捕て。駄の賞銭を

あるべくん為は。駄計の壮佼ども諜しあれし。越兼なれ石橋乃上あく。王女主従は追ひ著。矢庭は驚きうんとて聞とつ。侶なれ女房をうち殺してはいしが。誰ぞあらん。王女あれ。あやして神の憑て。膂力は百人を合したるごく。器械をろて縦横を早に働くるは為体は。餓えたる虎の群抵ぶ羊の中へ走り入りしは異なるべ。當れを頼ひは。薙伏せ。砂をうせしまふ紅は。牛打童が。車切は砂をうもあり。鼓拍を子の。胴切はるもあり。まど崖いろ付あはあはねは。多くは乾竹割は打くるされて命助るれは稀なり。翁が愛子も。日来親は地をおもひしれ報ひあや。胸さを刺ぶれるまで。なほ死もやうでかれこと

こと。と苦しくこれ牛でハ。物をもいひつるゐ。今ハ只蛇の息で
かり。ようひ熟くるこの草野も。ろうかいと遠くおぼゆる。親のこゝろ
の闇をハこゝで。年の齢も十六夜月の。欲ふふけくれ惡業を。
うとてのものが毛代吹て。麻代求め後悔も。是みん迹のあふるる。
神輿を舁で親ゐかすれ。子どもホが死羞代いくゐせんとて
かゝ口説。よくと泣が。ふくと泣。みりうともに吸あげて。涙ゐ湧ふ
と白毛髯。そりたる腰をうちゆ伸し。おのが家路へかへりまて。
松壽ハこれを目送りて。さハ生ハ落ハ撃ミ久ん。王女ハいづ代ゐ
ゆくとふん。いくく公ゆとなりて。其処よういまゝ路代いてゞ。
越来の石橋へと走りゆくゐ。日もそや没果て。二日の月うす
かみ出くり。とえミバ橋のこゝ形とへ。鮮血點くく流ミこゝろ。只

これ林間ゐ紅葉代踏く。秋代惜むゐ異ふ。哀ミとなり
真鶴ハ。ゐいくく働ぬとおぼくて。全體傷うゞれ処もゐく曲ゞ
くれ橋の下ゐ。俯くに倒ミこゝ。松壽ハかくれ景迹ゐ胸ゐづめ
がりつ。驚て砂代下ゐくこゝて。抱て起ともちくゐく。百千の強敵
代。騒ゐも退けるん壯夫も。恩愛のこゝハゐるかとあゝで。雨のごく
こゝふり落る。涙代押拭ひつ。左辺右辺をえくゐ。蝙蝠の羽
かゐ外ゐめにかくれゐものハなくれどゐ。ゐほ人やゆくとて。声をひと
えゐ。やよ真鶴。こ魂いまゞ天ゐゆゝ。五體いまゞ地ゐ入ゝゞ
へゝゞいくゐ代ゆゐ。凡いとと活る物。夫あればかゐゝゞ妻
あり。一世の安危を等くし。百年の苦樂代共ゐとる。偕老同
穴の契孰くハ他ゐとゐべた。ちうれども吾們ハ忠義ゐ締れ縁し

なれば。妹夫とらふも名のこゝろ。外ゝ過せし光陰へ。ふつと母と共に山鳥の尾上に隔れ寝そゝ。恋しとおりゝど恋しとも。いつどいへとて。忠臣節婦の。続ともなれ。そふんとて。互ゝ磐し誠ふと。神も憐をもひるべ。真和志の山の帯にする。寸ゝ長川の続りめひて。夫婦ゝとふよることゝのふんと。そひしりのを言語同断。狩場の雉子の矢ゝ傷られ。照射の鹿れ列子縄よ。かゝ別とのめんとへ。そろおとりの命なり。と形かゝ世に卿けり。且して渡うちこと。こゝれゝもあふで愚癡なりけり。死れ妻ハ歎くともかゝふば。つゝぐとそひふふ。君真物の擁護ゝよゝく。王女を不思議に。虎穴龍潭の危を脱とのふ。そのゝ世ゝかゝれゝくば。中婦君利勇ふ。いよゝ後やゝくて。草に刈ちゝひ木を伐とても。索出さで

ゝハあるべ。頼なれなゝ真鶴ハ。王女とおゝ羊ゝ生れて。廉夫人の妹なれば。面影もよゝく肖ゝり。今真鶴ゝ首に刈ゝく。寧王女乃もん分がりとし。利勇を欺て引ふふんゝ。死れ更ゝ君ゝ代る。その忠その功。比んゝのゝるべきれど。狡猾奸雄る利勇ゝ贋頸を受べてや。縦利勇に欺くとも。幻術りて。千里の外も瞭然れ。曚雲に入いふゝ。せんとゝかりゝして寧王女の。脱を果たゝのべゝもあふば。なまりゝ深く慮ゝばゝそ。ゝに捨てのち浮む瀬もあれ。縛成らどハそれまでなゝ。を。利勇を殺ゝふさゝ曚雲に刺ん。冀ゝ天神地祇。さらいかゝいのゝんまんん。おつゝ（一本ニオホツカケラ）くのゝんまんん。あをゝが嶽の山れ神。三十六島のおらゝゝ。二郎五郎の神童ゝ至るまで。邦国衛護賊臣退治の八千鉾

春紀弓長月續篇巻之五
松壽越来ふ
亡妻の首級を
持て

りて。利勇曚雲ホゞ眼ゑ遮て。ゑが亡妻の首をとりて。王女の肩を
ゐ代らせゐと。公の中ゐ爪折し。ゆゞて其物が首を砍くみちて。錦
の半臂ゐ押裹を晃を川へ衝流して。形のごとく水葬し。ゐん
世ゑ契れ妹と夫の。縁し果敢なれ月魄も。おちて往方を定ゥ
ゐらね。王女のうゑゐ恙なくへ。絶く恨へ仲田の郷。平安坐上原後
ゐ。野嵩の毛へ走ゆれるる。このとれ利勇ハ。なほ野嵩ゐ匹
て。かゥぐゥく動ど。越来の石橋ゐて悪少年ゐゞ。寧王女ゑ摘
捕らんとして。悉涼痴ゑ員。半死半生なるよしと変て。大れゐ呆
ゐ。ゆゥくゥびまるけして。王女を擁留んと謀とれ折うら。里之子
松壽。ゆり来くゥゐゆう。某越来の属村ゐる。照屋安慶田の間
ゐく。仂なく王女ゐ追著てゆゥしゃ。王女ゐ。ゆゆゥれ神ゐどの憑

ゥれゐや。生手にゥりて。いと猛くゑゑゥ。氷なること剣ゑ引提く立
在ゥゐゑ。面もゆゆゞ鬱て。刀尖より火生れまで。追つゥへゥつ。
挑ゥ戦ゐ行ゐ。ゆゞしくそゆりれ。王女ハ遂ゐらゥら衰へ勢ひ究
て。逃んとしゐゑ。忽地る捉ゥ引伏ゐん頸ゥれ落して。ひれ懃ゐ
物の憑ゥ狂しゥれゞ。生抱ゥゐ及ゞ。いと遠憾ゥそゆへとほゥう
かゐ述ゥりて。真鶴が首ゑゥり生しゥ。利勇ゥ眼ゆりて。贋頭ゥ
とゆゥんゐ。その舌ゑゥ引せゞ。と安危ゑゥゥの中ゐ決そほゥ
近く前ゥひゥゥ。大臣実撿したまへどゥへゞ利勇ゆゥゥ欲ゞゥ。左
右ゐ燭ゑ秉ゥしつゥれゑゥんゐ。鄉ゐ廉夫人ゑ撃ゥゥて。ゆ
首級とりて来ゥゥし。松壽なれゞ。聊も疑ゥ。ゥやゥゥこゥち笑ん
ゥいゐゆう。寔ゐ紛ゥべゥもめゥゥね。寧王女ゆてゆりけり。四辺身單

みゝ〳〵かゝれ大功なしてゝれしる。感激ふ堪ざと首里ふまいりく。伴の趣を物えめげるば。勧賞行るべし。中婦君の結るゝびのもうん。綉ゝくいひうけて。俄頃ふ諸方の軍兵ども引揚。蕉火鞭ふうてゝに通霄時代いそぐ。その曉かゝらふ都へ入りね。松壽そいと公のとゝく。ちひはるふ。輙く利勇を謀り給く。且訪び且怪こ。真鶴が面影そ。頗王女ふ似られも。えゝびてへ。王と燕君のごゝく形るに。利勇が爲ぞうも疑ざれハ。疑ふ。王女の純孝。夫人の節義。君真物の情えて。かゝうふしゝ。ゝのよこそといと憑しく。ちゝ。意ふもめらて。いよ〳〵利勇に侵嫡わどに。利勇もこゝ。二なりのゝとして。心腹こゝくうちめして。おのが輔と。他のゝ。昵とかゝらひまり。さる。尚寧王ハ。曚雲が幼術了魅されて。忠臣節婦ども殺し。世子併討して。却これ快とし。此度乃勧賞行るべしとて。まづ中婦君ふ相潭。曚雲ふその旨と仰せかゝ。曚雲うけまりて。利勇ども國相とし。松壽ども東風平の按司とて。當下尚寧王ハ。只顧曚雲ども稱贊し。これ國師の直言ふよりて。王女ハ毛國渭ゝ花子。ゝれを曉る。既ふ逆徒ハ誅〳〵。只おぼつなしハ中婦君有身て。その児の生ゝ日。遠〳〵とい。已しのゝ。疑ひなしもなゝ。これ老て位ども伝ふべき子ゝ。此ゝふ偽なくハ。速ふ驗をえまゝ。と宜それば曚雲微矣て。殿下ゝどて。この件のゝゝども疑ひゝふ。曩ゝもまうせしごく。中婦君の胎内ふ。ゝどしゝふ。子ハ。權者の後身ゝて。故ふ有身ゝれ。ゝえゝゝといくども。今ゝ十日の内ども

生じて。此子へいと安らうよ生れまふと。そのとれふこそ。疑ひとそ解まつべくれと。まうけふ尚寧王斜なるぞ。この日國相利勇ふ仰く。産養の准備ぞなんいそがしまひる。有形ども中婦君へ。雲ぞかもも分ふおぼえるて。子と産んゆあるべうもなふねど。指の神子なれ曚雲ぞ。ひとうは惜ふ世しい故こそあふとそひしぞ。密ふ利勇を呼びて。國師のいひつるゆ。一切こうを祈ぶ。つぐ分寞ふ子と産べれ狩。大臣そいうふ必くること。跳び。利勇笑もあくぞ。さてん情由ぞ。なは曚ぐでや。ぜとれ。ひとし丁のとぶふ。此子ひとうもおひしまうぐるふ。手浪ちげくうち寄ちる。五十ちかくなうまひて孕まふあるやはある。こへこゆ曚雲國師の狩謀ふ。ていよ改を。此ゆふ任し進らせんゆるこ。されば生れまふ此子へ中婦君の胎内ふあふぞ。豫く阿公して。事ぞ行しひへば。遅くとも五七日の間ふはりて玉つぐ。此こうふ安うれと。低語ふぞ。中婦君へ忽地満面ふ笑を含こ國師。かくのごく奇計を旋して。こうへと佐ること。いと狩ぶべ。加藤毛國摂詐伏して。王女廉夫人又首ぞ授く。くふよう枕を高して。國相くもに。永く洞房ふ楽を取ふ。宿をさべてこふ足なんこゆ曚雲國師の嘉恵ゆう。只管ふ稱嘆して。ゆふ打笑へ。利勇後方をえくうて。密語へ久しくすべかふ。垣も又耳ぬり。秘さべしく。と禁れば。中婦君へ慌しく。煩ぞ擂て笑ひぞ忍び。点ぞあふて立てうれぬ。

第四十二回

査國吉義ふ仗て中城を戦ふ
両孝子轎を擡て越来を走る

掟牌金査國吉ハ毛國鼎が親族にて。その心ざま義を重じとし。命に従しとすれど健雄なれバ。松壽が中城殿へまゐりて。王女と夫人を落しまゐらせんといふに任し。その身ハ駿馬に鞭を鳴らし志く。毛國鼎が家に馳ゆけバ。國鼎が妻新垣家子鶴。二男亀に。縡の趣を説示し。父が遺言を告しらして。さまぐに諫め励し。母子三人を。後門より落さんとするに。家隷もそや縁由あられ笑て慌忙たけ。おのが走路を索るのミ物の用にたつものもあらバ。新垣そ。いぬる年の緒より懐胎るく。てや臨月になりしかバ。いとくるしく起居も自在ならねバ。慭に脱れ出るとも足手まつはりにて便なくこそあらめ。母をバここに打捨おきて子どもらハまづ脱出よといそがしつゝ。涙の外ハなかくに落んとも

せざりけるを。兄も弟も孝心ふかくて。さるぐにしひにしらへ母を轎に扶のし。奴隷どもに舁せんとて喚びたるに。いつの程にか落失て。たゞかれまれ日来ハ肩に物一ツおはされることもなき胞兄弟が前にたち後になりて。件の轎を擡出さんとするに。兄ハ十五に一ツ足らず。弟ハ二ツ劣りてあれバ。かひぐしくハ挙動ど。さてもう得それ小腕にて母を舁りて走らんとす。路四五町が程も行とさなれど。孝心凡常ならざれど。兄ハ弟を励しつ。弟ハ兄を諫めつゝ。査國吉が浅からね。情の礼謝いふ間も。涙にくるゝ道芝の露と消えん父がうへを。思ひやりつゝ。母ごゝに悼しく。減込む肩の痛より苦しき胸ハ砕るごとく。生るかひなき息杖も。まさけくせんとを去行の。ようやく足を踏固め卷めんとする秋の日と共にはやく落てけり。浩処に。利勇が先鋒の兵士四

五十騎。犇くと推寄て。前後の門より乱れ入り。毛國冑罪あり
て。既に首を刎られぬ。さるほどに。妻と子どもを搦捕て近ぶせ
よと。南風原の親方勇仰をうけ。吾れ二分付せられて。こ
れむかふ。そこく生く縛を受よとぞ。のりける。此時まで。査國吉
そ。ひとり後堂にありて。耳を側てこれを聞。知
亀親子。忽地に追ひ詰られて。つゞ志も化とぶん。夫女子い。已
を。まるの為よかるらにたり。男子い已とるのゝ為ふ。死せよと
いふ。つゞ百年の命を捨て。毛按司が年来の恩に答るこの時
なりと。知るとゝごち。劔を引提て走り出。こゝろも切ぬ。ちらいふを
何人ぞ。これ鄭に仰をうけて。こゝに来りしに。人ぐのこせんこゝに
ぞ。汝ホ紫巾官の分付と。詐り。抜蒐して。切て奪んとする。

みやあふんぞふん。いと嗚呼と冷笑へい。早雄の壯佼ども。ゆもあ
ぞ大に怒り。こゝに呑長〜査牌金汝を國冑が妻子の討ふとし
て向られぬど。捉脱をるゆやとて。かゝみて来れ〜加勢は軍
勢なるに。功を奪の欲とて。罵ぬいふぞや。縱王命を叛く
とも。孰ぞ紫巾官の分付に悖ん。親子のものを生拘たるべこあま
へ遍ちゆくといふせもあくぞ。査國吉眼を瞪ふ。よしやこれ彼徒
を搦獲ずとも。いざ汝ホ遍ちまぐれ。加勢と稱して乱入し。
折よくい物をぬすんとて欲。盗賊ども。足のとのゆうれ方へこく退
出よと。罵れば。軍兵ホ〜怒り。査國吉こゝろあり。這奴ども
ともに搦捕てんのないうせそと。詈散動れ。戟を奈〜劔をうち
振り。咄と嘯て。競ひかれを。査國吉のゝもせぞ。出居のうちに

椿說弓張月續篇巻之五
さう直國吉
大ぜの
中城わ
血戰を

塞ぐ。二尺五寸ありける剣にて抜挿ぬく。矢庭に四五人を砕く。魚鱗鶴翼に連つる。大勢ぐ中へ割く入り。巴の字十文字に懸悩して。草楯の外を。覺の天遍當ぬを頼ひ。敵さ伏せ薙ぬ。半晌あまり戦ふ程に。血ハ流れて深鹿の野に溢れ。屍ハ横たわる。共塚の穴に臨ま異なのぶ。その武勇侮りがたく。忽ちかば。駭の軍兵辟易し。一下なぐれに崩れ。門外へと退く。その時査囚吉も。小ぶの外を。腹巻の横縫を突切られて。深痍数箇所負ふければ。今ハこれまでなりとて。関捷に礙と閉。家に火に放煙に紛れて。忽地に落失ぬ。討手の軍兵ハ此形勢おそれて。周章やうやうに門扉に突破りて。呼ばひ前こ入り。手ぐ少兵らち滅んとすれに。折しも西風烈しく吹て。瞬く間に。便屋耳房一宇も残らず灰燼となりしかば。衆皆呆れてせんすべ。なく。屍やあれとて。灰に埋かれて。彼此を索ねふ。それかとおもふのみ。この儘にさ立えぶば。罪科脱れがたうぬべし。さていふまもなくして。刃を金うせんと議すれに。小賢れて軍兵さこと生てらるるの。なりの隨に笑えめげるば。その懈を責られて。いひそふよしなうん立かりて南風原の親方勢ふまうえんあハ。査囚吉ニこ孫ありて。欲毛囚弊が妻と子どもを刺こと。家に火に放煙の中に跳入りて死ぬ。ようてその首に取て。獻ぜひ。けんふなでう吾倩に罪せられん。却てかくざれ恩賞あるべきぬ又ありぐ。よしや必死を脱れとても。毛囚弊が子どもハ海少し。査囚吉を涼痍を負ひぬ。ちれば家を喪ひ。狗鎗に刺

まことに猪のごとく。おどしが行ハれふとも。自滅せんを疑ひなし。と
いふに。衆皆笑て。この説きもつともべ。雷同して。堅まれる自方の
兵士が首級かたを落し。大たぶさなれと。小さぶさなる級。擇さりく
火の中へ投入る。燒燼して後ハ。これハ査國吉。かれハ毛國將が
ふたりの児子鶴亀。それが母新垣が首なんど。詫く標の牌級
耳ハ結び著。これを携て。通宵利勇が跡を追ひ。詰且首里
の都へ立入り。繹の越級ゆえあげ。利勇ハ軍兵ホと労ひ
て。件の燒首級実撿。やがて國將が首級と共ハ泊津ハ梟る
に。燒燼ましれば。その真偽級ましるものなし。只松壽のこと級
ましく竊ハ冷笑ひ。凡人死して後ハ火ハ燒ましるものハ中ハ灰
なし。生ばるがく燒るものハ中に灰あり。今この首級ともとこれ

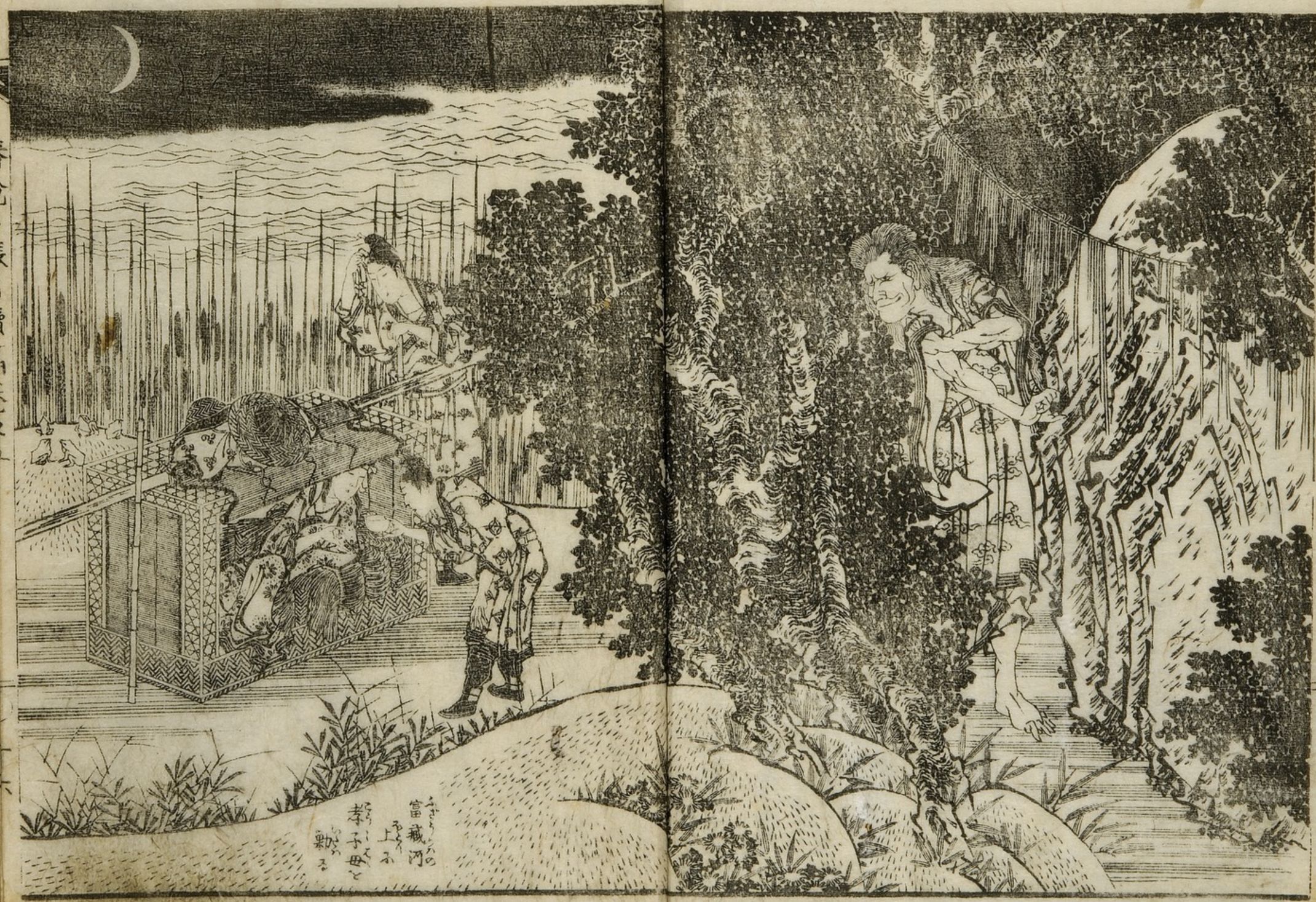
で。又に中ハ灰ハ。ましれば利勇ハ軍兵ホのいふとこと誤ハ違へり。
おりふし毛按司の子ども。査國吉ともに家ハ火と放虚死して
脱ましきりたるをんん利勇がかどりれる級曉ばるハ天當ハ孝子
義男級憐まふなるべし。差夫月日をいまぐ地ハ隨ぞ逆臣亡びて。
忠臣ばるべ世ハ出んを。何の疑うあるんとて。未まのもしくぞおかひ
なれ。却説毛國將が子ども鶴亀ハ生るとも死るとも父ともも。
あとをんべども。迹ハ殘まる母親のいうまばりのあるまふん。ところ
ハくも脱ましきく。ひたあるひ衣ハ身級襄し。ゆうて怨と愛死
かひく惜うねが級うばらふる。いとく小川の徒渉。裙も袂も乾
あくぬ。夜行ハいとばなりたなく。人ハ舁世轎級まつく。かくや流
人の路なれ路をたどりつ。肩のほてりも堪ばけれど母のぴを安ん

とて。兄も弟も。疲労たる事を。えせず。その夜は越来の山中を迷ひあるし。椎子を拾ひとりて母よ。すゝめ。同胞もらち食て。やうやゝに餓死凌ぐ。樹蔭。嵒の挾ふ。身を倚て。四日と過せ。がこの処は人けなき山路なれど。故郷へ程ちかけ。とべ。久恋の地ふ。あゝ。久志と金武の二間切を越て。大宜味羽地の山里へ到らば。首里へも。中城へも遠くて。世を潜ぶ。便宜。あるべゝとて。同胞よ。淡合て。さて。緯の越を母新垣よ。まうせ。ば。新垣。笑て。つゞ。身を女のるゝ。とも。かゝも。もん。身ホが意ふ任ゝ。ふ。あれ。久志も羽地も山北省の稍畫処ふて。道いと遠ゝと。笑くふ。熟ゝね逆旅ふ世を潜び。人一個ふ。まゞ足ゝね。十四と十二の兄弟ぶ。肩りて母を。ば。ゝ行んとゝ。ぶりとなれて。所ゐ。ば。ば。生れて後は。つゞ。ふ。

毎年に病つゞひて。うち臥ふあゝねど。心は清くして日を稀なれば。子どもは只二人ふ。そと。ひしふ。憂ふ去年の暮より。平ゝね身となりて。累る月ふ身も重く。道ゆくふも人なみ。ゝで。年歯ゆくまれ子どもらふ。舁ゝ母ふ。胸苦しさは翅折られ。親鳥の反哺ふ。命を。惜で。梢瞻めて。啼ゝ。ひもいうぞゝ。身に勝べて。忘まゝ。年を。孤ゝのを。四十ふ。ちくて。又子を。孝ば。生死の。行もおぼつかなさふ。按司國王ふ。あ。添く。医ゝ。いねる。陰陽師ふ。問ゝ。かば。その人。ちゞ。考て。ら。驚たゝれおりゝし。腹。ゐるは男児なり。生を。生るべゝ。行もなゝ。國王と仰ぎ。ゐん。かれ。洪福ありとゝ。ども。惜ゝ。いゝる。命は。究て。短ゝ。いひつるを。誠ゝ。かゝ。ば。おりゝ。彼は。利勇ゝ。間者ふく。

按司をあしくいかるるか。かくはしらくられあやまりろん。病おわく
て懐妊たる。母は死みて物ぞおりひ。爹くは手末すくよろにく。病
煩ひのろねど。寛枉ホ討まるひたくなたるのは命も強彖も又
命なり。羞ずましたるなれば。きのふまでもいざりしこれは原園
子ホて。父母は定うかくしば。極線の中ホ北谷ある。濱川の上丁捨
られるぞ。もん弟同胞が祖父毛國相ひくひうるひて。ひくねし
按司ホ妻くまくるこ。そのとたよ賜りし。九す五分ある懐劔は當初
汝う衣服の袖ま巻添て送くおたくれたのるれは實の親れ記念
なるふん。秘義せよと宜うせくぞ世ホ有がくそのふぶ。今りてもしも
弟ぞ故さて。男とまうしたは世ぞ中より学られる命の親氏も素
姓ホもふね弟が名家の妻となりあがて。孝行るれ子ぞ二人

までりてる幸はあり好ばら。家艱ホ迷ひ生て。かくれ歎たホ蒼柴
の蒼ホあはて紅葉鮒細は漏ても轍ホ吻く。母をばらくに捨て
て。同胞は遠く身を躲し。時ぞ結て仇を報ひ國の為ホ忠義を
竭して。爹くの汚名ぞ雪めるべ。といそがしろる親のこころ
は夜の殆の脛より長て別をとおくばてろ袂を絞りあへねを。鶴
亀同胞。ひたすくに慰さて。ゆうゆくに橋を擡起し。山路を北へとゆく
程ホ。金峯の間切のこうて。富藏河の上近く来よろうこの河は。
山北者第一の大河ホて。日暮ては紙ぞ生さて。鶴亀はいとじく心
ぢうはあれども。早もなふろね轎ホ。歩の運びも挟た世ぞ。ものび
かつて繁薄。ホと吻てて肩ぞうえこに想ひ。彼首ホ停立
河原までへえもやうび。曠野のとろホ日を暮し。秋の千種ホ宿


ふぢうらの
富藏河
ほとり
上ふ
孝子母と
歎かる

かりて。道をぐら准倚したる。乾飯を石湯に浸し。五日の月を燭ま
ちく。さぐり母を進ぜるに。さふねどに新垣ゆるかともなれおろひ
ゐ。公拾いつゝ煩しく。秋風に吹曝されこの三四日露宿して。身も
いといたく冷されぐあや。俄頃に産の氣つゐて。腸も斷離るゝ如う
におぼゆれとて。物見の窓に手を掛つ。苦痛いふべうもあらず。
鶴亀いこの形勢。に連忙。脇に拾ひ。信ゆるに勦まし
ども。中城を落るとて。公いそしくて。茶部ハこゝ忘れさうい
まして子を産ゆのあやまちもなれぬ同胞が。あるにうひまれぬ抱も
そぐれうゆられ暮蘋の夢。疾みふるふなりゑといひ慰むる折
しもあれ。北谷の阿公を曩に中婦君利勇ホが妻計に同意し。
寧王女を失ひ為に。辰の年月日時に生れる。女子に募て犧と。

海神に祈りて。産めば。緯既に伎倆の孫に入ゝんとせ一時忽地
毛國丼に看破せられ。隱謀立地に發覺して。その罪おのゞ身一ツ
に係り。ゆゑに北谷に追放せられたれども。利勇竊に。これを扶ぬし
て。ふゝく躾しおたてられに。毛國丼されて。忌憚るかゝもあらぬ。よりて
利勇ハ阿公に曚雲が謀を說きしに。この件のゆゑに仇せ。わるゝ。
阿公ハ只泣ゐて。彼此を徘徊し。はゝ。ずもこの処に來りて。新垣
母子が為に伺窺。既にその産の氣ほさきれをとりて。ふかく
欺び。ゆゑに樹蔭に立出つ。行るゆうほして。牆の内に入ゝ。あゝ
痛し。旅寢に宿を索ゆて。病ゐゝ。ぐらふ人にこそ。兄公ゝら其の処
退ぬ。姉がかりて。看病進らせべし。と信ぐらて。ほとり近く歩こま
つゝれど同胞ハ公放さぐ。はゝの程ハ固辭し。熟視ればの牙のゝ

賤しかりしが年の齢七十可うるらんとおぼしき老女なれば。ちごし
これが介抱をなすに。母を看病さもつづらくをちふるるにもあらじと尋
思して。語がいつまう。吾倘ハ越来ホ在近た。何がしの里人なるが。父を近
属ホまうして。ふるん初七の逮夜あそりくハ。母ハ平るふね分ホし
あれど。墓ホ来せまホしといふ。已ことに沼ど。轎ホ扶乗して。ゆこの
処まで来ける折うぶ。猛ホ産の氣つたくいとそぐなし。あれちる
ぎた茅剤ホ。ふべるれし。と叮嚀ホ。茅も共ホかさ口説どるほ
うたなる母子がうえハ。漏さじと。ちふ紬ふすぶ。涙ハ畏難うろう。

第四十三回

腹を拷て阿公赤子ホ奪ふ
棺を流て鶴亀亡父ホ見た

その〻た阿公ハ。縁由を失て。頻ふそぶ涙を押拭ひ。かゝた曠野あて。

母公ホ産の氣はたれるハ。おなじころなれ少年の介抱もろふホ仕
せ。と。ぶぼそさホ推量ま。痛しくこそ。ぶるなれ。むし婆くが
親なるものハ方技をりて活業とし。これ。難産ま子の生ーゆうも。
些そ見なれて。ぶるホ。生穏婆ホあハまそかもあふん。まづそのゆうと
えせるハ。といひうけて。鶴亀ガ迹ホ居ろう。轎の裏へ手ホ。し入
まて。新垣ガ胸さうホ拍おろし。十の指の腹をうち返し。詮つ。ちごし
うち案じ。こハ今も考べたゆうなり。ちうれども。夕露ホそぐらて。ち
く冷ひねれば。輙くハ産ごけん。茅の力を借まあふぞハ。産
母の氣いよ〻乏く。或ハ交骨開ど。或ハ胞衣下らぬ。いと難義ホ
及ぶぐし。且ホ両足い〻腫ふろて。脚の指の間ま黄水ゆ。かれば則
子氣の症せ。さぐの方剤ゆ。ぐけまど。そハ醫師ふ〻ねば。よくを

ちゝぶに。只速ふ催生湯を用ゆべし。催生湯ハ桃仁苟茶。牡丹皮。茯苓。肉桂。この五味を等分ふめしてよしこの方ハ即仲景が桂枝茯苓丸ゆして。世俗のえゆめといふものゝ是なり。この毋ハ北へ出されて。富義河と笑つゆゆべ。茶店あり。やよ兄公。月も没果るべ。路のほど便なるべゝ。彼処へ走りゆたく。茶剤買りて茶ゆとしこそ。ゆがせば同胞ハまたく慌忙たつ。落がいめり。これハ富義河とやらんのほとりにいゆたく。件の茶剤を買りて茶つぼ。家身をちゞしも毋のほとりゆ離ゆとゞよく看病ゆ。といひもめゝゞ北ハ投てゞ走去られ。且して阿公ゝ。高ゆに呑うち鳴し。鈍ゆ。あまりに火急なる故ふ。いつべたるもいつぶし。彼五味の茶物の中。桃仁ハよく炒。苟薬ハ赤たりのふあゝざれゞ功能ゆし。兄公ハいまゝ遠くもゆゆゞ。ぞめて走りいゆ。そゝ追ひゆゝと。焦燥あゞを。いゝいゝゞ立かゆて。同胞ゆるも毋公の傷ハ離ゆんハ公りとゆし。これがとて勧る茶剤ふ。切能なくハ化ゆなり。さてやよんかくやせんと。年ゆハ勝れ怜悧ふ。ゆひ惑つる手ゆをゝく。阿公ゝを声ハふり立。この二町金が尻のおりさよ。あん対ゆんどゝ幾十人うち守あたくれがとて。かれ何の要あたゞり。婆くが憐ぞ。えつ親ハ殺をべたふ。ゆうぬハ夜行が怕しくて欲。をやゆたゆゝと。叱られて。いゝゝもいゝゞ稲むゝ。蚤ハ草の葉ハ。踏ゝひてゞ走アゆ。阿公ハ亀が後影ハ。木がくるゝまで目送り果。さて新垣ふ對ひていふゆう。いと苦しゲふハえゝゆゝゞ。婆くがいふるハよく笑ゆゝ。ゆゝ。孝の氣ハけゝるがゝ。目今生るべゝもなくゝ。翌の朝の潮

なくてもその身今こそあれ同胞の少年が生くるは便なき身の
侍るに。さぞかしあてはこころ得るがさかしく腹なる子の欲けれバ。儘の
ものが竊かにてかく信ずる身は欺得のこ腹に子なくはあへかりもせじ。
いと理なれるなれど。三十と越る難産は大かたは生がたしあなく苦
痛がせんより。あれ我と思ひ諦めて腹を裂して児がらくべし。ちかせよ
とて懐に小劒のあるなれバ。はじめより探りあてて。よく志りて侍る
なり。それ貸すべしとひらけて襟の間より手をさし入れ引出せし劒の
衣の紐に携へて新垣は苦しげなる息下に阿公がうち瞻り縁故は
しらねども腹なる児も何かはせん母が命も惜からねど子を産ずし
て死なるのみ怪しき鳥の生がうえ雨の夜毎に迷ひ出ると聞ど
かも罪障ふかき後の世はさまれかくまれ今なるところ子どもら

が父が喪ひ又母が人の為に殺されしとも志らずして買はれて来れ。
催生湯の名をも似ぞ。末期の水ともならざりせバ。さぞな胎に
ありながらん惜からぬ命を惜む。それもそうなれ子は因果の鳥夜
暗よりくらきに迷ふが憐とへ事なるぞや。産落して後に
こそこの児が進るべきれ生まれ出ると。かれ口説バ。阿公は耳を
さしよせ何いかなるすら。蚊のなくぞうなりける声して。老らる耳
へよくも聞えぞ阿ねん我は果報めでたき人ぞかし土偶に対
ひてもいひ志らせるすへもあらねど。とてもかくても今殺さ。
その耳へ聞せるは。冥土の餞別惜からぬもあらで。てよなかれ婆がこの
情にこそ。いかなれ人の妻かは志らねど。腹なる児はおほけなくも
琉球国王の世子と仰ぎ貴れて万民の父母として富三省を

こと子と奪ふ
靭垣と殺して阿公
骨肉の

有ふ到らん。かゝれ洪福ハ夢ゆめゝもこんゞとしゞされゞこそ鬼しく。腹を裂衣せよ。といひもすれふうて情由あるゆなれゞ。そハ詳ふ告るゝ及ゞゞ。おん身ゞ腹をゝん捺りて左孕ハ男児と。ありて而産の子たゝふハ死ゞひのある親も面目。痛うハ殺さゝね。ちゞしゞが行ゞゞ。辛防せよ。とゆのくしく。いるゝもゆゆ不審。原来いゆる月陰陽師ゞ。腹ゆる児ハ短命なれゞ。國王とゆる洪福ありゝと説ちゝせしハ実言なる欲。実ゆゆもめれゝゞ子とりて。世子と仰ゝてハ。罪ゆゝて討をゆふ。夫ハ絲ゆ叛逆の。悪名代世ふ流を。さる正ゆゆに与せんや。身ハ醢ゆせゝゝゝとも腹ゆる児をゝふゞゞとゝくゞ彼を懲べたちゝもたえてゆゞ月の五日ゞ月の影あらゝて。草葉ふ聚く虫の声ちゝえゆゞ母親ハふゝうの子どもゞ産やとて。

戦栗ゆゝ伸あゞれゞ阿公ハ声ゞまゝえて。あゝゞゞしゞゞと罵もめゞへゞ。項ふ掛ゝれ嚢の紐をさゝと引離て臂短ゝ。あゝとゝ待ゞ玉襷新垣ゞ胸前絡んゞ。仰ゝまに突倒ゝ。玉散る刃と閃ゝて膳洩くかゝて破ゞ。ハ叫苦と魂消る傷口へ。ゞとゝ入ゞて引出ゝゝ。ゆふ違ゞ男児ゆゝ。胞衣切放ハゆる母ゆふ。忽地あゞる産声もこの世の風乃吹ゝてゝゝゞ人ゆゝとゝぶせゝて。剣衣ゝひゝゝつ。血ゝ塗れゝゝゝゞと拭ひ。襁褓もゝゝえて亡骸の紬引裂ゞ草の花も。ゆゝゝと散る母の衣武羅ふハめゝゞ鳴子の緒の。遠く響も少年ゞ。ゞゝゆる欲。と新護ゞゞゞ袖ゝ引裂む。赤子とゝのゞ懐へ押入る。折ゝもめれ焦火ちゝゝて。ゆるゆゆゝ。阿公ハこれをゝんゝ。ゝゝゝ。眼。彼を二人の少年ゆゝん。親子ゞ素姓をゆるゝゝ。ゆるべれハこの懐剣なゝ。

ゆしくものあらぶと。とりごもつ血を拭ひ。刃を收めて鞘に納め。腰に跨が懐に。ちがうく赤子を揺賺し。足に信して逃去ぬ。かくこもちて鶴亀は。四五町あまり過ぐるほどに。ふと見あへば。似ぞ。富義河へいと遥かに。彼処あり。茶店にさしこむ。河を渉ざれば人家もあらぶ。こゝに歎き。こゝにとゝまり凝ひ。同胞途より。ふとみなり。乾稲守する翁に火を乞ふく。蕉火に路をてらし。いとづゝに。ゆりまれば。胸さへいとうち騒ぐに。心もとゝ安からで。ゑぐることすれどえも熟ぬ。夜行は殊に東西分てとうど。株に跌て荊棘に足を傷られ。辛じてゆり着に。赤子の泣声うとうみ。ゆめ。さてに恙なくうまれとり。こん。母公はいとふ女とゝんいとゝ心とゝ。同胞端く舊の処へ走りゆり。まづ火に抗く。轎の内に見るに。母は其の処にあはちぶして。右辺なる叢の中に仆れ。腸長く生く。鮮血に塗れとり。同胞はこの景迹に且驚き且悲。こゝいとみと泣叫び。ゆゑて左右より抱起すに。腹に切裂れて死ぬれば。泣く救へども。人間一生の哀傷は親に喪ひ。子は後くにまとゝ。ひ。まいて非命に死る母。ありしに変る面影なれど。母は物いふ欲と揺動し。悲歎するかとゝ。ゆゑは。さてこゝに年も勝れば。熟るゝ涙を拭ひ。ゆゑに彼鬼婆くに信ゆゑいひようて。吾倩を遠離しは。こゝろに物のあれべし。ともに曉らぶして。歎れ。茶前買ふゆゑにこれを今さらに悔く及ぶ。胎内の子れ。えざるに難病の茶物にせんとて殺してその子に。とりこりうん。ひゆゑに朽をとて躍跎して泣ふれば。亀は息杖にうとて。仇人は恩つ遠くはゆゑ。這奴響とゝん。と勢ひ猛く

立あげる裳を引とゞめ。やよ待まく。汝が志はさるゆなれど。野干玉の
くゝ玉秋ふ仇人の往方をえとめばとして。逐ふもいくそ及ぶべき。這奴が
面はこれも總まろ。ちゞしゞ程は脱ろ。とも。天の羅はえも漏じ。勢心
ふ追んとして。却く仇と謀ふれるば。志もいとづゝ形くふん。生る日乃
羞よりも。えゞるし死ざませば。いと恥しるゆゝと答くは生平
ふ宜ひた。渉ひ。さ母の亡骸を。人ふえせんは不孝。とくゝおさゆ
進ふせん。といひ諭しつゝけるとも。枕方後方ふ立對ひ。ゆゝじとも
ひどろ蟬のうゝゝ夢うゝゝ。ゆめも。爰あもあられ化野の露ふ先
ぞろゆゝ母の空ひ骸ふ。うふ拾手ゞ。常ゆひ風を身ふぞ去る。茶毘
ふへあふね薪火も。暗ひ迷を照ゝひやと。やうやく納る轜を棺ふ
掩る桐の杖。折ひてかひなひ母の恩。おくふんとするふ泳重くゆろ

肩入ひてく舁揚ひて。ゆひ逼りて哽咽る。兄は街珠の病る鶴。弟
は浮木ふ漂ふ亀の生死流轉も眼前富藏河を投て。ちゞ。ゆる
このとひてまでは。琉球國ふ土葬火葬の葬式ゆゝ。水葬のことりてふ
とせーゝ。鶴亀はとうして。母の亡骸ゆ河原へ舁ゆゝ行ふ。天そ
ゆのぐと明くゝ。貧ひたゆのは。足ることゆ去るもあふねど。貧ひ
を生平とそれば。憂ふ堪るゆもあれど。親雲上按司と呼れる
人の子ゆ。その母ゆ葬るふ。棺も形く導師もあふで。同胞これを
舁ふ。手ふ友もなく。烏ふ鳴ひ。犬ふ送れ。やうゆ水際ふ轜をおひ
居くゝ。きのふのうれを思ひ出ひば。浅ましたるゆひふべらもあふで。此
河水は涸るとも。汎瀾の乾く涙はあゝじとて。同胞ゆろともみうた
は說ていくりるは。抑家公は顙忠世して。ちゞゝ君を諫め。國の患を

りて身の患とし給へるゆゑ。良茅却苦しと厭ひ。寃枉ゆゑ命を隕し。家壞れ妻子眷屬離散して。操節正しき母公さへ。杜騙殘毒なる老婆ゆゑ殺されて。胎内の子死られ。親の像見なりとて。年頃秘蔵しまし〳〵ける宝劒併奪ひ去られし。過世の中に業因なり。およそ誠あるものは。神明かの〻ふびに衛まふと。人もいひつれども。そは虚言あてありなし。老弱不定常なれば世ゆゑ。病てむなしくなりぬるもあり。五日が間に二親なくなり。非命ゆゑの世を去るひて。迹ゆゑ殘れる憂身のとゝまる。何処へ流れゆく秋の。あはれの木の葉かくまでよ。凋落果てゝ追蔦も。公ぞうにまた向の水を受ぬく三熱の苦艱を脱れ。六觸の汚穢を雪めゝ。水清くれば魚住ぞ風静なれば船行ぞ限なき

哀別夜鶴鉛ゆゑ悲鳴し。捨ぐゝた情愛生龜筒ゆゑ脱落を公焦れ腸腐れて。哀風の歎言下に盡きぐゝ。蠱そうけもの人と。まつり子て同胞う河原ゆゑ撲地と猥ぶ声を惜ぞ泣よりう。且して。ゆゑ〻もゆゑ身を起しうひなたてう言。人や笑く。さへ泣ゆゑ。歎ぶと送ゆゑ諫め励しつゝ。ゆゑてかくぶね河水へおろして流を轎も。これやこの世の別ぞと。おりへば憂を十す鏡。ゆゑ新さへも面めゝぞ。波のまゆ〻流れとゆく。河隈遥ゆゑ目送りつゝ。潛然としく合掌し。伏拜む脊のかさゆゑ物の倒れかゝれゆゑて。忽地撲と郷音うゞ鶴亀いうち驚て。そは何ぞとて見えるにいうめしさ大男刃を抜うけて。仰さまに仆れ血ゆゑ吐く〻死るこけり。緯の為体いと不審とて。兄も弟もまゝ上ゆゑ立よりつゝ。熟視れゆゑ年頃ゆゑ父

富藏河よ
鶴亀母を
水葬を

毛國將ヲ仕ふ。老僕。握翁報といふのみ。り救ふべくもやとて
亀ヘ向ひ引起して洗んとするを。鶴ハ忙しく推とゞめ。狂狼を死
ふるも。かろしく近つくべうふび。這奴ハいねる日。恩高ち主ふり先
ハ中城ハ逐電ちるふ。今故ありてこふ来ふり。刃ハ抜うけて仆
れ為体。ふ同胞の首ハ取さ。身の頼ひを求んとせしヨ疑ひ
ね。さればその暴悪を憎しとて。君真物の蹴殺しふふやあん
ずるふ。努憐をまゆふと爪弾して説諭せば。亀もげふと点ハ折
うふ。風ヨ戦ぐ柳の葉のさふふくと散うれを同胞奇ちく仰ふれば。
樹の下れ小高ち処ヨ曚曨として立在りのり。その打扮紫綾乃
官帽を載ち。深青色の袍を被き。龍幡の紋ある。黄ふる帯ハ結び。
描金鞘の劔を引提。毛國將ハ在り世の面影ヨ異ふふび。ふうりの

ふどもいこれをふふ。めるつぐ父ハておしふり。さてハ恙ふて世を
欺鶴ヨて仆り。亀ヨて仆り。と名告つほびつ慌忙ち走りよふふく
されば忽地ヨ消て又ふふ朝霧ヨ。ふえつかふふ汀の石ヨ。ぶつを
厭うで。其処ふ足処ふと追へば逐ふ秋風ヨ。声ほびふふを河鴉哀
ふいいふで。ふふ波高ち。富嶽河原ハ遥ヨ走りて。ゆくともふら
ぞ北谷と。流谷山の間ふち高志保の浦ヨ惑ひ来つ。このふち
夕陽海ヨ没て。秋の晷の短ちを。ふる。そもこふハ何地ぞと同胞
面ハふうちめし。ふれもめふで。忙然ふり。

椿說弓張月續編卷之五畢

文捨冊

松之庵